

子どものことばが 教えてくれたこと

第2回

鳥になって

岩 辺 泰 吏



持ち上がりで六年生を担任した四月。ゆかが自由日記にこんな詩を書いてきた。

鳥になって

鳥になって

空を飛びたい

鳥になって

自由に歌いたい

……

(詩は部分)

私は「みんな、こんな思いを浮かべるのではないだろうか」ということばを添えて、学級通信に載せ、読みあった。

——私も同じことを思うことがある。

——自分も遠くまで飛んでいきたいと思うことがある。

……

……など、共感のことばが寄せられた。

それから一カ月もたない月曜日の朝。全校朝会が終わると、一年生から順に教室に戻る。最後に六年生が、なんとなくおしゃべりしながら玄関に入るのを待っている。その列がみんな入るのを

そつとやり過ごして、ゆかが私のそばに寄ってきた。

「先生、みんなが 私のことを はずすの……」

そう言って、見上げた目にはもう涙があふれていた。日直の子に、ワークブックの自習を伝えると、保健室の隅を借りて話を聞いた。

前年度末、彼女は口の周りにヘルペスができた。その治療のために紫色の塗薬をつけていた。マスクをしていたが、それはクラスメートにもわかることだった。彼女と相談して、給食のときは保健室で食べることにして、子どもたちにも説明した。ゆかは元来、独立心の強い粘り強い子で、そうした間も休むことはなかった。

しかし、男子たちから、「あいつの使った水道の蛇口は飲まない」とか、「お前の配った牛乳は飲まない」などといういやがらせが生じ、次第におしゃべりの輪からも外されるようになった、それがヘルペスはすつかり治った後まで続いているということである。

ゆかに、相談相手にしたい女子の何人かをあげてもらい、休み時間に話を聞いてみると、子どもたちはわかっていたのである。「知らぬは教師ばかりなり」という状態であった。放課後には女子全員の相談会をもち、翌日、臨時の学級会を開いて話し合った。ゆかは自分のつらい気持ちを日記に書いてきて読み上げてくれた。

いわなべ たいじ 読書のアニメーション研究会
(アニメーションクラブ) 代表。元葛飾区立飯塚小
学校教諭。

アニメーションの方法と思想を応用して、読書啓
発をはじめ、国語および学習全体の改革へのチャ
レンジを続けている。

その中でわかってきたのは、事の始まりは女子
の中から起こったということだった。ゆかは、あ
まり器用にすばやく物事を理解しこなすというよ
りは、努力を重ねて獲得していくタイプである。
体育も苦手な方だった。文字は楷書できつちりと
書く。私が赤ペンを入れるのが恥ずかしくなるよ
うな整った文字である。そして、日記も自由提出
とはいえ、ほぼ休むことなく続けている。国語単
元の新出漢字十数文字を使って、連載ふうに見
物語を書いてきたり、詩を書いてきたり、私には
とても楽しい読み物ともなっていた。

そういうことが、別のリーダー格の女子えみの
やっかみを生んで、ヘルペスを機会に男子をあ
おつていじわるが広まったのであった。えみは大
好きで打ち込んでいた太鼓クラブをやめさせら
れ、私学受験に追いつめられる毎日に入っていた。
えみも器用にこなすタイプではなく、次第に持ち
前のおしゃべりな明るさを失っていく様子が見え
ていた。私は何度か、お母さんと話し合いをもつ
たが、耳を傾けてはもらえなかった。

事の経過が明らかになって、この件はつきもの
が落ちたように、ほっとした空気が教室に生まれ
ていったのだが、担任としては恥ずかしいこと
だった。ゆかは、苦しい教室の中から、逃げ出
たいという気持ちで、「鳥になって 空を飛びた
い」とうたったのだ。好きな音楽の時間も、なん

となくしらけ、声を響き合わせることがなくなっ
てきたことをさみしく思っていたのだ。

退職して、ある大学教育学部での授業でこの詩
を取り上げ、担任になったつもりで「赤ペン（メッ
セージ）」を書いてもらった。

すると、三分の一ほどの学生が、「心にもって
いる重いものを、先生にも聞かせて」という内面
への共感を書いていた。六年生のころ、自分も同
じような体験からこのような詩を書いたことが
あって、「ここから離れたい」「遠くへ飛んでいき
たい」と思ったという。

普段の授業では表に現れない学生の内側を、少
し知ることができた。彼らが「教師になろう」と
する思いに、子どもに寄せる共感を見て、とても
うれしく思ったことだった。

*児童名は仮名。